

池道之助の建立「池家墓所の墓碑銘文」より・・・

中浜万次郎と交友があり、幕末から明治維新にかけて活躍した中浜浦郷士・池道之助は、地震津波等の自然災害についての意識が高かった。

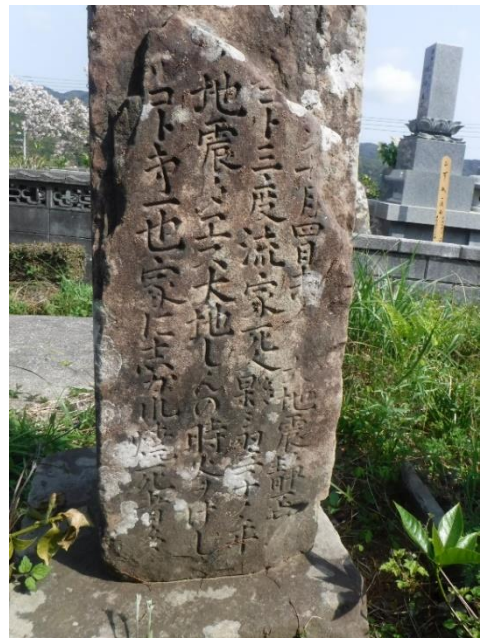
中浜峠に建立されている池家墓碑には、
「嘉永七年寅十一月五日申(さる)ノコク 南無阿弥陀仏 震静否(しんしずまるやいなや) 浦々大潮入(うらうらにおおしおいり)家死人夥(いえ・しにおびただ)シ」(意味：嘉永7年〈1854〉11月5日午後4時頃、地震がおさまるとすぐに海から津波が押し寄せてきた。流失家屋や死人が多かった。)と記されている。

「津波が襲ってくる前日から海水や井戸水がにごりだす。また、水が干上(ひあ)がって枯れてしまう井戸もある。こんなときに皆さんは筆舌(ひっせつ)に尽くせない悲しい艱難(かんなん)が起こると心得(こころえ)しておくことである。

後世の人にこれを伝えようと、中浜浦居住の池道之助がこれ(墓碑兼災害碑)を建立した。安政2年(1855)三月に建立した池家の墓所。宝永4年(1707)10月4日(宝永地震)午後2時頃、大地震がおさまるとすぐに海から津波が3回押し寄せ、家が流され、死人がたくさん出た。その翌年まで中小の余震が続いた。

大地震が発生したときに火の始末を行い、家を出ることを第一として心得るべきである。家に押しつぶされ、火事で死ぬ人が大変多かったと伝えられている。」(意訳)

池家墓所の墓碑面には、安政地震とその前に起こった宝永地震を例に出し、このような意味の文面が刻まれていた。この墓碑は、市内一円に所在する他の自然災害碑とともに土佐清水市域近世近代自然災害碑群(計10基)の一つとして土佐清水市指定文化財(有形・歴史資料)として昨年11月27日に新規に登録された。



池道之助津波記「今昔大變記」より・・・

「嘉永七年の地震津波」(いわゆる「安政南海地震」)について、道之助は「今昔大變記」という文書を記し、土佐国内の伝聞や自分が実際に見た被害状況をここに記録している。興味深い記述を次の(1)～(3)に抜粋し、掻い摘んで記しておきたい。

(1)「大地震すれば大津波入る事ゆだんすべからず。この時ゆり静まるや否や 湊の内の汐引き干し事恐ろしき也。中浜浦など湊の口まで汐引き、河原のごとし。」

「清水湊(港)の内渡し船なくて渡れる様に引かれ候」

大地震のあと、大津波がやってくるので油断してはいけない。ゆれがおさまるとすぐに港の潮が引き、港の様子が恐ろしいような状態となる。中浜港などは港の入口まで潮が引き、まるで河原のようになっていた。清水の港湾内は潮が引き、船がなくても対岸に渡れそうな状況であった。

(2)「大ゆりの時、とび、からす、諸鳥、飛ぶことあたわず、地へころび候」

大地震で大きくゆれているときに、トンビやカラスなどの鳥たちは感覚が麻痺してしまい、飛ぶことができず、地面に転がっていた。

(3)「足摺岬伊佐村共はゆりもほそく別状なし」「松尾浦も右同断」

足摺岬地区はゆれも小さく、(海成段丘上にあり) 海拔高度が高いため、津波で家屋や人的な被害はなかった。松尾地区も同様であった。

(4)「清水浦は町の家のおき(軒)限りつかる。この時塩浜海となる。まきの浜小春と申す女、塩浜の堤を通る場合汐入り来たり 堤こげども共に流れ死す。」

清水の町では、家の軒辺りまで潮に浸かった。本清水(元町)から戎浦のマキ浜まで帰る途中で、塩浜の堤防を渡っていた小春という女性が、津浪にのまれて、堤防もろとも海に引きずり込まれて死んでしまった。※清水の町には江戸時代末～明治7年まで塩浜(現在の本町・栄町・中央町周辺)が形成されていた。

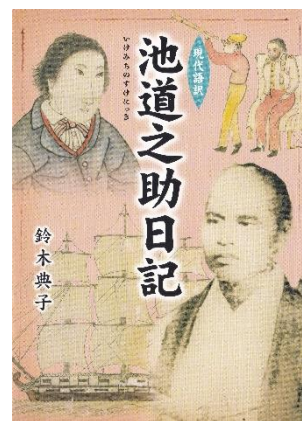
(5)「大岐村は浜割れ汐入りそこなわれ(損なわれ)た田あり。」

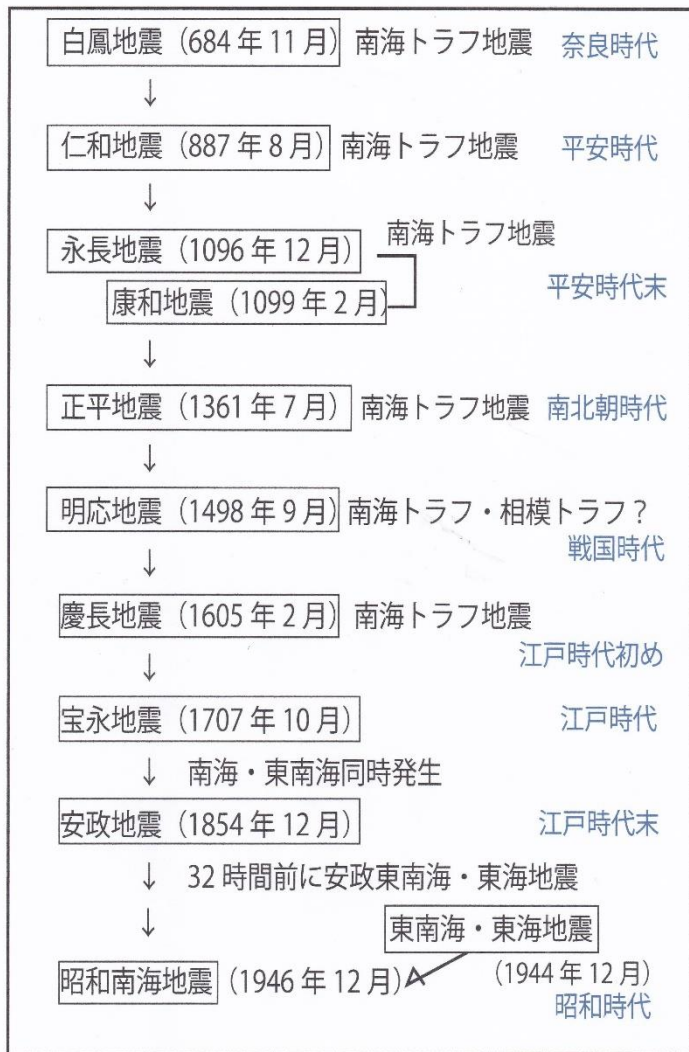
大岐村では、砂浜が割れてそこから津波が入り込み、損壊した水田があった。

以上のように池道之助が記した「今昔大變記」を読むと、嘉永7年(1854)に起こったいわゆる「安政南海地震」の市域の状況が断片的ではあるが記述されており、その実態がよく分かる。ほか大浜・浦尻・越(小江)・加久見・三崎・竜串・下川口・貝ノ川・大岐・下ノ茅(下ノ加江)などの被災状況、市外の下田(四万十市)・宇佐・高知等の他者から伝聞したと思われる内容も併せて記されている。これらの情報を地域別に整理すると当時の地震規模や今後の防災における留意点として活用できる情報がかなりあるのではないだろうか。

この「今昔大變記」の内容は、鈴木典子『池道之助日記』

(リーブル出版、2011年)の236～257頁に掲載されている。鈴木典子さんは、池道之助からちょうど五代目に当たるご子孫であり、土佐清水市郷土史同好会に所属され、歴史にも熱心に取り組まれている方である。なお、右上の鈴木典子さんの著作書籍は、土佐清水市養老の「ジョン万資料館」で販売している。





慶長南海地震(1605年)以降は、90年から150年くらいで発生している南海トラフ地震。

小松勝記ほか『歴史探訪南海地震の碑を訪ねて』毎日新聞、2002年参照。

白鳳地震から慶長地震までは、歴史資料もあまり現存しておらず、その詳細は分かっていない。

もしかしたら、年表に記述した地震以外にも記録に残っていない地震があった可能性がある。

宝永地震以降の地震については、文献資料が比較的に残っており、断片的な情報ではあるが、地震の規模やその状況の概要を捉えることができる。

宝永地震以降の地震の中では、文献などの記録から判断すると、宝永地震が一番規模の大きい地震であったことが分かる。

1707年10月(新暦)、南海地震・東南海地震・東海地震が同時に発生し、各地に甚大な被害をもたらした。

安政地震は、1854年12月24日(新暦)、安政東南海・東海地震が発生し、その32時間後に安政南海地震が発生した。昭和南海地震については、土佐清水市内の状況を記した資料は少なく、今後、聞き取り調査などを通して、記録を残しておくことが課題である。

かまじゅんいち 構俊一『小学1・2年で習うのに大人も読めない漢字』幻冬舎、2020年より

- 多 勢 → (×おおぜい) ○たぜい
- 幾 年 → (×いくとし) ○いくとせ
- 水半球 → (×みずはんきゅう) ○すいはんきゅう
- 弓 手 → (×ゆみて) ○ゆんで
- 水 口 → (×みずくち) ○みなくち
- 土 州 → (×どしゅう) ○としゅう) ※土州とは土佐国のこと。

あまり難しい漢字を使ってないのに意外と読み方が分からない漢字や熟語があるのにビックリしました。読むとなんとなく得したような気分になります。日頃知ったかぶりして誤って読み恥をかくということが時々あります。逆に、しっかりと読んで、周りの人から知識人だと感心されるかもしれません。興味のある方は書店もしくはネットで・・・。